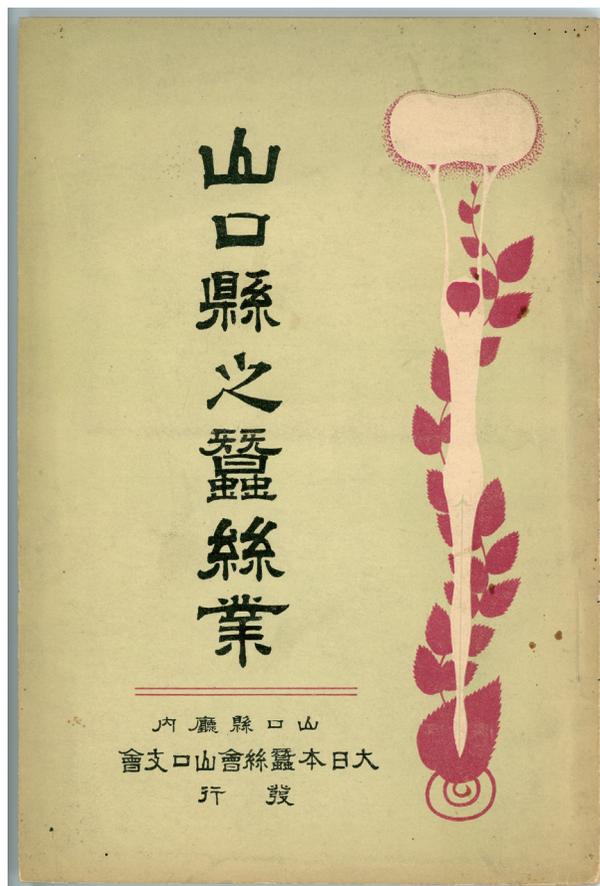
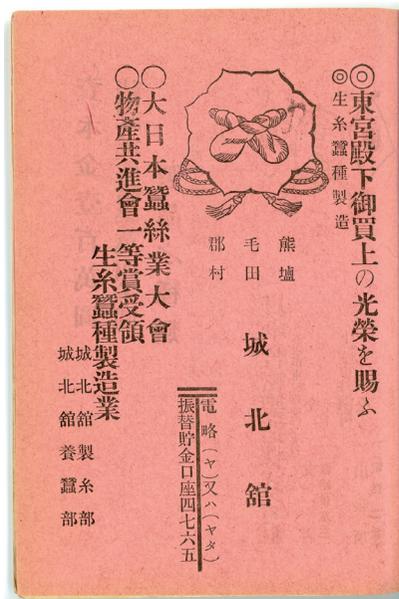


戦前の県内製糸業



*御園生翁甫文庫132『山口縣之蠶絲業』（昭和8年，大日本蠶絲會山口支會）。
県内の養蚕の歴史がコンパクトにまとめられています。



*1908（明治41）年の行幸記念で刊行された『山口縣案内記』（一般郷土資料B1，作間久吉編）に収録された「製糸工場城北館」の広告。

解説

生糸は、開国以降のわが国の主要輸出品として重視され、国内各地で養蚕業・製糸業の育成振興が図られました。山口県でも、技術伝習の目的で、官営模範工場富岡製糸場に子女が派遣されたほか、養蚕教師の巡回指導による生産技術の向上や、生産者の組織化による経営安定など、産業化に向けた努力が積み重ねられました。

1883（明治16）年創立の萩織工会社川島製糸場では、生糸生産の先進地上州群馬での経営経験者である支配人のもと、富岡工女が技術指導にあたったとされます。収入の魅力に加え、「薄化粧に小粋な出で立ち」の上品で高尚な職種として、製糸工女は、農家の子女にとっては羨望の的ともなっていました。

明治末から大正期にかけて、岩国の義済堂製糸、萩製糸、塩田村の城北館、日良居村の神崎工場、徳山製糸、大田村の松村工場など、いくつかの器械製糸工場の存在を「県統計書」で確認することができます。

なかでも、萩出身の実業家賀田金三郎が経営を支援した萩製糸は、海外輸出を念頭においた大規模な製糸工場でした。製品の品質も横浜市場では信州の高級糸以上の評価を得たとされ、皇室への献上品にも含まれるほどでした。

糸の価格は景気変動の影響を受けやすく、基幹産業として製糸業が定着することはありませんでしたが、養蚕は、手近な農家の副業として奨励され続けました。